統合失調症患者家族への魅力ある家族会の工夫

～多職種連携を主軸にして～

北海道 医療法人社団 五稜会病院
○吉村美香　松田慎子　井出瑞門　山田寿代　鈴木 ゆかり
八木こずえ　中島公博

はじめに

- 統合失調症と診断された患者の家族を対象に、25年にわたり家族会を開催。
- 病院機能の変化に伴い、急性期患者が増加し、患者層が多様化。家族のニーズも変動し、病院内で行う家族会として対応の難しさが生じてきた。

家族会を継続する上での問題意識

ニーズの違い：発症後間もない家族と、長期経過した家族が混在。

マンネリ化：歴史の良さがある一方、マンネリ化で魅力不足になりやすい。

多様なニーズに対応し、多くの家族にとって役に立つ魅力的な家族会にしたい！

当院概要

＜五稜会病院＞

- 単科精神科病院
- 診療科目：精神科・心療内科・内科・消化器科
- 病床数：193床（急性期病棟38床・ストレスケア思春期病棟48床・療養病棟A54床・療養病棟B53床）

＜統合失調症家族会の特徴＞

- 対象：統合失調症の診断を受けた患者家族
- 頻度と時間：月1回、90分。オープングループ。
- 平均参加人数：12名 （平成23～24年度）
- 参加者平均年齢：40代～70代の家族。50代の家族が最も多い。
- スタッフ：精神保健福祉士3名、デイケア看護師2名

【工夫1】バラエティに富んだプログラムの開発

＜目的＞ 家族のエンパワメント ストレスケア

情報提供プログラム
- 統合失調症講座 ＜医師＞
- お薬講座 ＜薬剤師＞
- 「コミュニケーションのコツ」「認知機能障害について」 ＜臨床心理士＞
- 社会資源の紹介 ＜精神保健福祉士＞

話し合いプログラム
- 家族茶話会

家族自身のストレスケア
- ストレッチ
- 抹茶
- 陶芸体験

当事者理解プログラム
- 当事者による講義
- バーチャルハルシネーション体験

患者との交流促進プログラム
- デイケアプログラム体験
- クリスマスカード作り

【工夫2】活用の呼びかけ＆継続参加支援

案内を各病棟に配布。

病棟、デイケアなど多方面から情報提供を行う。

家族会参加のニーズをキャッチしやすい環境を作る。

【工夫3】ニーズに合わせた組み合わせの検討（多職種によるアセスメント）

①ニーズの抽出

- 急性期：・正しい知識（疾患・服薬・予後）
- 回復 初・中期：・社会資源 ・再発予防 ・接し方
- 回復 後期：・親亡き後の生活

②内容の選択：情報提供／話し合い／当事者理解／家族自身のストレスケア／交流促進

（例）今月はこれで!! 情報提供 話し合い 家族自身のストレスケア

【工夫4】多職種での情報共有＆支援ポイント整理

多職種ミーティングで情報共有。

関係スタッフ全員で共有。連続した支援につなげる。

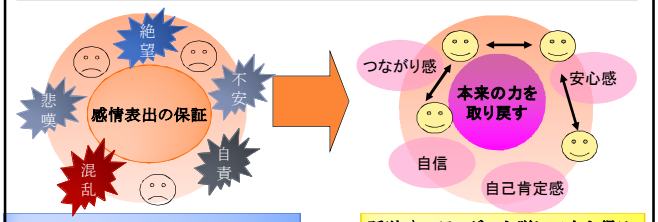
進度に沿って支援ポイントの整理を行い、構造化。

結果1 家族会が家族の力を引き出すプロセス

＜支援のポイント＞

- 【多職種による視点提供】・正しい疾患知識の提供 ・多方面からの家族への労い
- 【グループ機能への働きかけ】・苦労の分かち合い ・問題の切り離し ・経験に基づく具体的アドバイスの促し
- 【家族自身のストレスケア】・自身を主語にした語りの促し ・家族の健康な部分への焦点化

共通基盤：どのような感情も肯定
肯定的なフィードバック　家族の経験や対処の支持



家族がどの時期にも抱える共通の感情

孤独やスティグマを脱して力を得る

結果2　事例

- A氏　65歳女性　家族会参加継続期間10年。
- 長女が15年前に発症。以後9回入退院を繰り返す。

家族会参加初期

・長女の要求するままに応じる。
・「病気なのだから何もできない」と考え、心配と不安から先回りして代わりにやってあげる。
・夫は仕事で忙しく、A氏と長女の二者関係が強い。

現在

・「病気になっても、できることはある」主体性を尊重し、見守る姿勢。
・夫（退職）と本人の関係性を促進。意識して長女との距離をとるように。
・畑作業など自分の時間を持つようになった。

結果3　グループの成長

・スタッフの促しがなくても、他家族への自然なフィードバッグを行い家族同士の関係性を深めるように。
・“苦労”の表出だけでなく、家族を主語にした趣味の話題等の“楽しみ”も共有。笑顔が増え、グループ全体が明るくなる。

結果4

参加者の変化：
継続参加者と入院中の家族の増加。父親の参加も増加傾向。多職種ミーティングでの共有により認知度が上がり活用効果が得られた。

アンケートの声：
「苦しいのは自分だけじゃない」「病気が理解できてきた」「分かり合える唯一の場」「前向きな姿勢へとつながった」などの回答多数

考察

1、ニーズに応じたプログラム拡充と柔軟な展開が、マンネリ化を防ぎ、継続や新規参加につながった。

2、家族の力の支持を基盤とした働きかけは、個々のセルフヘルプ機能を高め、相互に支援し合う家族会へと成長させた。

3、多職種連携による家族会内外への取り組みが、効果を促進し連続した支援を生みだした。

まとめ

発症時期が異なる家族が多く、様々なニーズがあるなかで、多くの家族に継続参加をしてもらえるよう、運営の工夫を重ねてきた。

・多職種による新規プログラムの工夫と、家族をエンパワメントする継続的な働きかけが、家族の力を引き出し、会全体の成長へとつながった。

・ニーズは多様だが、根底にある感情や家族同士の関係性を育てる支援が、スティグマの軽減や家族が本来持つ力の回復・ゆとりの創出につながった。

課題

○本人の病状により参加が不定期となる家族へのフォロー

○入院・デイケア治療における連携のさらなる充実